ティーチング・ステートメント

所属　薬学部　薬学科
名前　戸上　紘平
作成日　2019 年 7 月 27 日

【責任】

薬学部において、薬剤学における教育・研究活動を行っている。主たる教育活動は専門たる薬剤学関連科目（生物薬剤学、物理化学、衛生・医療薬学実習（薬剤学領域））の担当、薬剤学分野の所属研究グループの実質的な運営である。

【理念】

医療は極めて高い専門性からなり、また、その科学的知見および技術は日進月歩である。基礎的立場にせよ臨床的立場にせよ、薬学を修めて医療の一端を担わんとする学生には、進歩していく医療に対応し続けることが可能な能力を身につけることを強く望む。すなわち、大学を卒業した後も自ら新たな知見と技術を取り入れ、社会の変化に対応できるように行動し、学ぶことを遂行できる人財の育成が自身の使命である。また、医療となるとどうしても患者に対するアウトプット、すなわち臨床にばかり目が向きがちである。臨床応用を支えるのはあくまで基礎的研究であり、その重要性を理解すると共に、未来の臨床に繋がる事項を学び支える姿勢が必要である。以上の点を学生に伝えるためには、まず自分自身が大学教育を担う者として薬剤学の専門家であり続けるよう邁進し続けていかなければならない。

【方針・方法】

上記の理念を実現するためには、学生自身が学ぼうとする姿勢をいかに助けるか、専門性を認識させていくために、自身の専門家としての姿勢を保ちながら教育を進めるのかが重要となる。『学生』という言葉の意味に反して、自ら学ぶのに必要な「やる気を出させるには～」という議題が、よく大学でも挙げられるのは哀しく思う。一方で、元々ある程度学ぼうとして入学した学生たちのやる気を削いでいるのは大学側でないかとも思う。この認識を元に、私の教育上の方針と具体的に採っている方法を示す。

＜自ら学ぶことを推進する＞

・講義や実習がただの作業になっては、学びも何もあったものではない。講義時間外の自己学修は重要であるが、それ以上に講義中にいかに集中して学修させるかを重視している。講義は自ら作成した講義プリントを中心に、教科書で補足していくように進めているが、ただ読むだけ穴埋めだけという進行は絶対にしない。敢えて未完成のノートのようなプリントを配布し、講義中に学生と共に作り上げるスタイルを採っている。重視していることは、学生の到達度を逐一こちらが把握しながら、その都度の到達目標を認識させることである。

・もう一つの基本姿勢は「学生の邪魔をしない」である。アクティブラーニングという言葉を聞くようになって久しく、代わる代わる様々な教育方法が試行されている。しかしながら、学

修段階や単元の特性を考慮せず、無差別に導入すべきではないと考えている。また、元々やる気のある学生にしてみれば、クリッカーを用いたTBLなど、一時的に流行った教育方法を導入すると器具の取り扱いを覚えて対応する必要に迫られたり、ただただプレッシャーをかけられたりする。方法論先行の講義にならないよう、定期的に自身の講義進行方法をリセットし、最小限にそぎ落としてから、過去の反省から本当に必要なものだけを付け加えている。自分がその内容を学ぶ際に意味がないと強く思われる方法は、一教育者として取り入れるべきではない。
＜専門性を認識させる＞
・「それ学んで何に役立つの？」という問いに対する答えは、学生のモチベーションを保つのに重要であろう。薬学部なので、臨床応用に向けた話を低学年次から逐一していく必要があると感じており、講義中に様々な関連エピソード（製剤化や薬物間相互作用など）を採り入れている。一方、薬学部卒業時の大きな目標に、薬剤師国家試験の合格があるが、それに傾倒しすぎないことも重視している。「国家試験に出題されないことはやらない。」となれば、それはもはや大学薬学部ではなく、薬剤師専門学校なのだから。
・必ず一コマにつき、一回は研究に関連した話をする。一息ついて集中力を回復させること、間をとることでその時間中についてこられなくなった学生に時間を与えること、何よりも学問の根底に研究という二文字があることを伝えるためである。ただし、独りよがりにならないように、簡潔にまとめて短時間で行うようにしている。これを行うためには、日々の研究遂行と研究に関する情報収集が必須であり、自らの研究者としての研鑽ともなっている。

【評価・成果】
・授業評価アンケートでは、毎年どの項目も高評価を得ている。
・力を入れている講義プリントを共に完成させる方針が、広く受け入れられている旨を示すコメントが多く寄せられている。
・低学年のうちから、基礎研究を行いたいという学生が少数ながら来室する。学部生の間から薬学関連学会での発表や学術論文作成を行っている学生もいる。
・薬科大時代に行われていた、各学年で最も優れた講義を行ったと学生に評価された教員に与えられるGood lecture賞を受賞したことがある。

【目標】
・簡単なことは優しく、専門的で難しいことは簡単に伝えられる講義を企画する。[2020年]
・学生の到達度をより理解し、フィードバックをかけるための方法論を確立する。ただし、特殊な方法を用いて学生の負担になることは絶対にしない。[2020年]
・他の学生よりも伸びよう、特に専門領域について深く学修、研究しようと研究室を訪れる学生を増やし、独自の研究グループを構築する。最終的には研究所まで設立する。[2035年]
・日々の研究成果を、学術論文や国際会議で必ず公表し続ける。[研究者人生が続く限り]